

九州 震電

ハセガワ 1/106スケールプラスチックキット

製作・文 政府開発援助

1. 震電について

海軍試作局地戦闘機「震電」は、第二次世界大戦末期に1機のみが完成した単座戦闘機である。当時急務とされた高々度での敵大型爆撃機の迎撃を果たす為に、最高速度約750[km/h]というプロペラ戦闘機の極限ともいえる性能の戦闘機が必要とされた。この要求を、エンジンを機体後部に配置した前翼（エンテ型と呼ばれる機体設計により実現したのが本機である（同時期に各国で前翼型戦闘機が研究されているが、本機の優れた設計や高性能は他に類を見ないものである）。武装は機首に30[mm]機銃4門を備える他、戦闘爆撃機として運用する際には六番（60[kg]）爆弾4発の搭載も可能であった。

試作1号機が数度の飛行試験を行った時点で終戦を迎えた為、本機は実戦では全く使用されていない。試作機は戦後米国で各種調査に用いられ、現在はポール・E・ガーバー保存修復施設に保管されている。復元が心から望まれる。

2. キットについて

初版が発売されたのはかなり前で、コインシリーズというヘリコプター・ジェット機のラインナップ（統一スケールではなかった）に零戦とともに混じって売られていました。当時は珍しい接着剤不要のキットでした。その後ビニール袋包装のベーシックひこうきシリーズにシリーズ名が変化し、現在はキャプーと主要部品が塗装された状態（震電以外はカラーバリエーションが存在する）のワンアワーコインシリーズとして展開されています。シリーズはどれも手ごろなパーツ数・組み立て易さ・美しい凹モールド（当時、主力スケールである1/48や1/72ではまだ凸モールドのキットが多かった）と三拍子揃っており、数多くコレクションするのも楽しみの一つでしょう。

震電については、小さい前翼や垂直尾翼がはめ込みでびたりと決まるところが素晴らしいです。また、同シリーズの零戦ではギミック優先で分割されていたプロペラブレードとスピナーが実機同様に分割されている点も嬉しい限りです。

3. 製作と塗装について

気軽に組み立てる分にはなんら問題の無いこのキットですが、価格やスケール故の省略箇所が見られる為、手元の資料を元に追加工作を施しました。コクピットは例によって四角くくり抜きましたが、意外と内部が良く見えることに気付き、プラ板で底を作った後にヒートプレスして作ったシートを追加しました。垂直尾翼に補助尾輪を追加した時点でプロペラ直径が大き過ぎる事が判明し（涙）、プロペラブレードを切り詰めています。30[mm]機銃のモールドをヤスリ掛けの際に削り落としてしまった為、伸ばしランナーで（正しい位置に）再現。機体下部のアンテナ支柱も伸ばしランナーで作直し、位置をやや右側に改めました。このシリーズでは内側の主脚カバーは主翼と一体成型となっているので、モーターツールで完全にくり抜いてプラ板で新造しました。

塗装は手持ちの資料間でも違いが有って悩みましたが、世界の傑作機の記述を参考にしています。機体下面は銀色の上から薄く明灰白色を吹き付け、上面は暗緑色を筆塗りしました。いずれもラッカー系の海軍機色（三菱系）です。プロペラとスピナーはマホガニー、味方識別帯はサファリオレンジの上から黄橙色を重ねています。マーキングは日の丸のみデカールが付属しています。部隊番号等はー



前方より



切無かった様です。墨入れは今回もガンダムウェザリングマーカーで行いました。

後方より

4. 製作過程



コクピット内部の追加工作。手前にあるのはシートのヒートプレス原型と絞ったプラ板。



脚収納扉をくり抜き、尾翼に補助尾輪を追加。



プロペラ先端のストライプを塗り分けているところ。プロペラブレードは切り詰めてある。



はめ込み式の恩恵に預かり、キャノピーを外したところ。自作したシートが見える。